

⑩呼吸器疾患

チアノーゼ

・チアノーゼとは

呼吸困難の動物では、舌の色が紫色になっている状態がよくあると思います。これがチアノーゼです。チアノーゼは、主に気道が閉塞したり、肺でのガス交換が著しく障害されることによって、動脈血中の赤血球内ヘモグロビンに酸素が結合されていない状態で起こります。生命にかかわる低酸素状態ですので、緊急処置が必要です。また、舌や歯肉、眼球結膜が白くなっていることがあります。これはチアノーゼではなく、可視粘膜蒼白といいます。可視粘膜蒼白も低酸素状態ですが、呼吸器疾患ではなく貧血や、ショック・血圧低下などの循環障害に関係しています。

・原因

①気道閉塞

咽頭、喉頭、気管が種々の原因で閉塞します。ワクチン接種後などに生じるアナフィラキシーショック、熱中症による咽頭や喉頭浮腫も、比較的多くみられる原因です。短頭種気道症候群、咽頭内異物、喉頭麻痺、反転喉頭小嚢、喉頭虚脱、喉頭腫瘍、気管虚脱、気管腫瘍、気管内異物なども気道閉塞の原因になります。

②喘息発作

気管支が閉塞して呼吸ができなくなります。多くは一過性です。

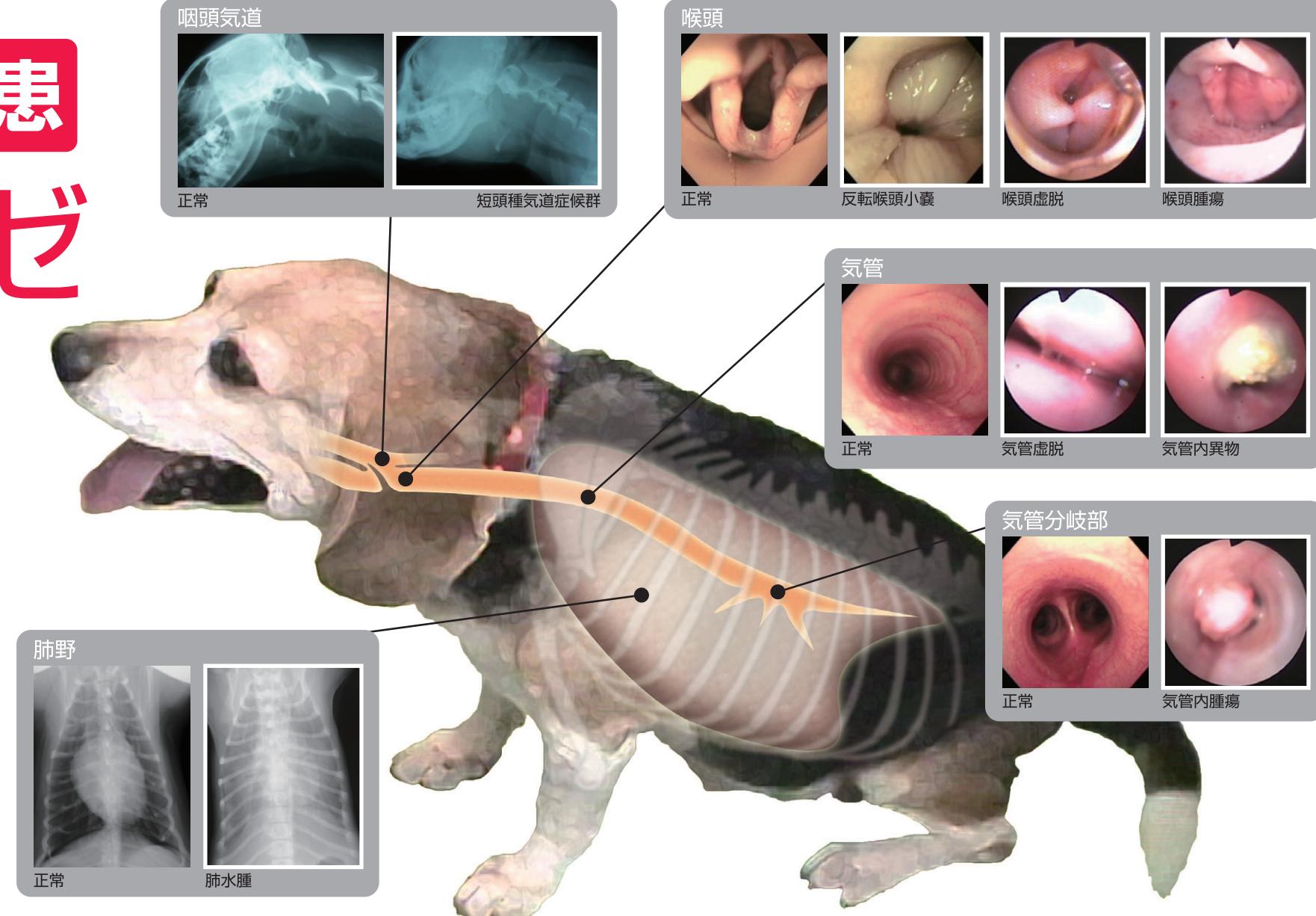
③肺疾患

肺水腫、肺血栓塞栓症、肺出血、慢性肺疾患の末期などです。

④先天性心疾患

右→左シャントを示すファロー四徴症などです。

⑤ヘモグロビンの異常



メトヘモグロビン血症など。酸素と結合障害を起こします。

※主なチアノーゼの原因是、①気道閉塞と③肺疾患です。

・症状

正常な舌色はピンクから淡い赤色ですが、呼吸困難症状に伴って赤紫色から青紫色になります。多くは、犬座姿勢(おすわりの状態)となり、首を伸ばして動けなくなります(上図)。重症の場合、起立できず横になってしまいます。

気道閉塞の場合、口を大きく開けて、ガーガー、ヒーヒーなどの異常呼吸音を伴い、胸郭を大きく動かし、肋骨のラインが浮き上がるような呼吸をして苦しがります。呼吸数は30～40回／分ぐらいです。

犬は、呼気によって上昇した体温を放熱しているので、気道閉塞があると体温が上昇し

ます。それがさらに呼吸数を増加させ、気道粘膜の炎症を悪化させ、気道がほぼ完全に閉塞して、チアノーゼを示すようになります。体温が下がると口を閉じるようになりますが、呼吸様式は変わりません。

短頭種気道症候群、喉頭疾患、気管虚脱などで、このタイプのチアノーゼがよく起きます。肺水腫などの肺疾患の場合、口を大きく開けて、浅く速い呼吸をします。呼吸数は、40～200回／分ぐらいです。

症状が悪化すると、深く速い呼吸となります。それでも呼吸数は40回／分以下にはならないようです。慢性症例では開口呼吸しないことがあります。しかし、浅く速い呼吸が続きます。

・診断

急性症例では、既往歴などの問診や症状から

ただちに暫定診断を下します。体温の上昇があるかどうか確認してください。X線検査などは、状態が落ち着いてから行います。

・治療

ただちにマスクや酸素テントで酸素投与を行います。酸素の流量は3L／分程度から始め、舌の色や呼吸数により増減します。特に肺疾患の場合は、酸素投与が有効です。

体温上昇があれば、保冷剤を腋下や内股に当て、冷たく水で濡らしたタオルなどで体を冷やします。気道閉塞の場合は、この外部冷却が非常に有効です。したがって、酸素濃度と温度が同時に調節できるICU(集中治療室)の設備で管理することが望ましいでしょう。喉頭麻痺や喉頭腫瘍などでは、緊急気管切開を行うことがあります。

⑩呼吸器疾患

チアノーゼ



写真1
犬座姿勢(気管虚脱)

より深く 「チアノーゼ」を 理解しよう!

チアノーゼは、急性の呼吸困難症状です。特に写真1のように、常に犬座姿勢をとり、速く努力性の呼吸をしているときは、適切かつ迅速な対応が必要です。

①急性か慢性か

急性発症の多くは、呼吸器関連の緊急疾患です(写真2)。慢性経過を示している場合、先天性心疾患や慢性呼吸器疾患ですので、既往歴聴取が重要です。

②喘鳴音があるかないか

ズーズー音は鼻咽頭、ガーガー音やヒーヒー音は喉頭、ヒューヒュー音は気管や気管支の閉塞を疑います。ガチョウの鳴き声様のグワーグワー音は、気管虚脱の可能性があります。

③胸式努力呼吸か浅速呼吸か

胸郭が大きく動き、呼吸数が40回／分以下の場合は、気管より上の気道閉塞が疑われます。呼吸数が40回／分以上の浅く速い呼吸は、肺水腫や肺血栓塞栓症が疑われます。



写真2
チアノーゼ(急性呼吸困難)



写真3
外部冷却の1例(緊急処置)

これだけは押さえよう! チアノーゼの看護ポイント

※チアノーゼを起こす呼吸器疾患をあらかじめ知っておくことは、緊急時対処に役立ちます。

●怠ってはならない! 看護時の注意点

チアノーゼは、動物看護師が最も危機感を持って対処しなければいけない動物の症状です。事前に電話でチアノーゼが生じているとわかったら、ただちに獣医師に伝えてください。動物がどのような環境下にいたかを、飼い主さまに詳しくお聞きしてください。

熱中症や予測される疾患がすぐに思い当たらぬ場合は、まれに飼い主さまが気づかないうちに異物で気管が閉塞していることがありますので、落ちていた物などが思い当たらないかお聞きすることあります。

来院したら、どのような形でもよいのですぐに酸素投与を開始してください。同時に体温の上昇にも注意を払ってください。40℃以上の体温上昇があれば、ただちに保冷剤や水で濡らしたタオルなどを用い、体温を下げてください(写真3)。ウチワや扇風機などで、風を当てることも効果的です。

通常は30分ぐらいで落ち着いてきます。チアノーゼの一次処置は、どのような疾患でも酸素投与と体温管理のみです。処置を開始したら、常に呼吸の状態を監視し、15分ごとに呼吸数を計測してください。落ち着いてくると胸の動きがよくわかるようになります。

これら対症療法を10分以上続けても、改善徵候がまったくみられない場合は、重篤な肺疾患が予想されます。そのまま失神、呼吸停止してしまう可能性がありますので、その前に気管内挿管と呼吸管理ができるよう準備しておいてください。

動物自身も苦しくて動搖しているので、気分的に少しでも落ち着けるように、部屋を暗めにしたりしてストレスの除去に努めます。

また、動物が飼い主さまに会うと嬉しくて興奮してしまい、さらにチアノーゼが悪化する場合があります。面会時は、その動物の性格に合わせて時間を調節したり、状況によっては面会を控えていただきます。命に直結してくる症状なので、観察中に少しでも変化があったらすぐに獣医師に伝えることが大切です。

●わかりやすく! 飼い主さまへお伝えすること

チアノーゼは緊急疾患です。窒息状態になっているか、肺水腫などの重度の肺疾患の可能性があります。在宅時に体温上昇があれば、風通しが良く、空気の冷たいところに移動し、少し様子をみてから来院するか、保冷剤等で体を冷やしながら来院するよう指示が必要です。緊張や不安も呼吸困難を悪化させがあるので、飼い主さまにはできる限り動物にやさしく声をかけてあげていただくようお伝えします。

来院後の飼い主さまは、動物の急変に動転し、治療開始早々から治療結果や原因について矢継ぎ早にスタッフに聞いてくるかもしれません。チアノーゼは、まず酸素投与と体温管理をしっかり行い、呼吸の安定化に努めることが最も重要です。それをますしきり飼い主さまに伝えてください。詳しい検査は、呼吸安定化後に行うべきです。

一次処置に集中するなかでは、舌の色や呼吸パターン、呼吸数、呼吸音、体温変化、治療反応をよく観察してください。聴診器で心雜音なども確認すれば、心原性肺水腫の可能性もあります。そうすることで、気道の閉塞か、肺疾患か、ある程度の予測ができます。ほとんどのチアノーゼはこの一次処置をしっかり行うだけで、呼吸が楽になってきます。